

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	社会福祉法人栄光会からすたろうの学び家		
○保護者評価実施期間	令和8年2月3日		～ 令和8年2月9日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	2	(回答者数) 2
○従業者評価実施期間	年 月 日		～ 年 月 日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	5	(回答者数) 5
○訪問先施設評価実施期間	年 月 日		～ 年 月 日
○訪問先施設評価有効回答数	(対象者数)	7	(回答者数) 7
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年2月28日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	保護者アンケートで 「こどものことを十分に理解し、こどもの特性等に応じた専門性のある支援が受けられていると思いますか」の問いに、全員一致の「はい」という結果だった。 この結果から、私たちが日々行っている支援が、単なる「見守り」ではなく、意図を持った「専門的介入」として保護者に明確に伝わっていることを示していると考えます。	・課題解決(できないことをできるようにする)だけでなく、本人の得意なことやこだわりを「支援の入り口」として活用し、意欲を引き出すプロセスの構築している。 ・常にアップデートし続ける組織体制を意識している。 「昔ながらの支援」に固執せず、常に学び続ける姿勢であら続けたい。 ・「家庭用カスタマイズ支援ツール」の提供を行なっている。事業所で使用して効果のあった手順書や視覚支援ツールを、ご家庭の環境に合わせてリメイクして提供し、場所が変わっても一貫した支援が受けられるようにしている。	・お子様の特性、パニック時の対処法、得意なコミュニケーション手段をまとめた冊子を保護者と共に作成したい。進学先や将来の就労先に、本人の「取扱説明書」として引き継げるようにしていきたい。 ・学校の担任等と、「具体的な介入手法(声掛けの統一など)」を記した共通シートを共有し、お子様がどこにいても一貫した配慮を受けられる環境を作っていきたい。
2	保護者アンケートで 「必要なときにこどもの状況を保護者と伝え合い、こどもの健康や発達の状況、課題について共通理解ができていますか。」の問いに、全員一致の「はい」という結果だった。 この結果から、家庭と事業所が同じ目標を共有する「パートナーシップ」が機能していると考えます。	・「落ち着いていました」ではなく、「今日は〇〇の活動の際、指示を聞いてから行動し始めることができました」のように、具体的なエピソードの提供をしている。	・病院、学校、放課後児童クラブ等、ご家庭で共通して使用できる「本人への関わり方マニュアル(統一ルール)」を事業所が中心となって作成していきたい。
3	保護者アンケートで 「事業所の職員から共感的に支援をされていると思いますか」の問いに、全員一致の「はい」という結果だった。 この結果から 支援の土台となる「心の繋がり」が築かれていることは、療育効果を最大化させるための基盤であり、当事業所の組織的な強みであると考えます。	・お子様の課題を伝える際も、まずは保護者の苦勞をねぎらう言葉(「お母様も大変でしたね」)を添え、「評価者」ではなく「共感者」としての立ち位置を明確にしている。 ・できたことの報告を「業務的な記録」にせず、「今日、〇〇ができた時、スタッフも本当に感動しました!」という職員自身の喜びの感情を乗せて伝えている。	・深い共感職員は職員のエネルギーを消耗させる側面もあるため、職員自身が心の余裕を保てるよう、定期的なメンタルチェックや、スタッフ間の「ねぎらい合い」の仕組みを整えたい。(バーンアウト(燃え尽き)防止のメンタルケア) ・「困った行動を、その子のニーズや強みとして捉え直す(リフレーミング)」視点を、保護者と一緒に練習していきたい。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	保護者アンケートで 「事業所では、家族に対して家族支援プログラム(ペアレント・トレーニング等)や家族等も参加できる研修会や情報提供の機会等が行なわれていますか」の問いに「はい」5「どちらともいえない」1「わからない」1という回答だった。 児童発達支援や放課後等デイサービスの事業では定期的に保護者会の開催のお知らせはしているが、保育所等訪問では、個別の保護者支援で留まっているのが現状である。	・平日の日中など、就労している保護者が参加しにくい時間帯に固定されている。プログラムに誘われても「参加してみよう」という動機付けができていないところがある。	・単なる説明会ではなく、「絵カードの作り方」「パニック時のクールダウンの方法」など、専門的な関わり方を保護者が体験・習得できるワークショップの開催も検討していきたい。

2	<p>保護者アンケートで 「定期的に通信やホームページ・SNS等で、活動概要や連絡体制等の情報や業務に関する自己評価の結果を子どもや保護者に対して発信されていますか」の問いに「はい」5「わからない」2という回答だった。</p> <p>児童発達支援や放課後等デイサービスの事業では定期的にSNS等の情報発信はしているが、保育所等訪問では、個別の保護者への報告で留まっているのが現状である。</p>	<p>・児童発達支援や放課後等デイサービスの事業では定期的にSNS等で活動の様子を発信しているが、保育所等訪問支援での活動の様子は、保護者へ掲載についてのアンケートをとっていないので、発信していない状況である。</p>	<p>・どこまでSNS等に発信していいか、保護者へ掲載についてのアンケートをとっていきたい。</p>
3	<p>訪問先アンケートで 「訪問支援員の支援に対する知識・技術等に満足していますか」の問いに、「はい」2「どちらともいえない」1という回答だった。</p> <p>このことから、訪問先とこちらの手法は違っても、本人の成長を願うという「目的」は同じなので、そこから橋渡ししていけるといい。</p>	<p>・本人の特性に基づいた心理的負荷の軽減を優先し、保護者へ家庭で実践してもらう事項を提案し、『環境調整』と『情緒の安定』という土台作りを専門的にアプローチしている。</p> <p>・本児の特性上、過度なプレッシャーは回避行動を強めるリスクがあるため、現在は成功体験を積ませるスモールステップの技法を選択して支援に当たっている。</p>	<p>・学校での一斉指導と、訪問支援での個別配慮をどう組み合わせるのが本児にとって最適か、ぜひ先生方の知見も伺いながら足並みを揃えていきたいと考えております。</p>